

関東大震災が中央区をおそう

1923(大正12)年9月1日午前11時58分、相模湾を震源とする地震が起こった。地面は大きくゆれ、木につかまってもはねとばされてしまうほどだったという。中央区でも、たくさんの大きな被害を受けた。

地震から火事へ!>

地震で建物がたおれたり、こわれたりしたが、それよりも地震のあとに起きた火事の被害のほうがすさまじかった。火は2日間にわたって燃え続け、区内のあらゆる建物を焼きつくした。区内の小学校も全校焼けてしまったほどだ。被害の数がどんどん増えていき、多くのうわさやデマなどが飛び交い、ただでさえ混乱のなかにいた人々の気持ちはどんどん暗くなっていった。

地震、こわいね。さらに火事まで……。



地震直後、銀座通りに出てきた人々。



京橋区築地三丁目(現・築地一丁目)にあった会社のかざり屋根がそのままずれ落ちた。



京橋



燃える銀座の町。

火は風に乗って、あっという間に燃え広がった。

楽しい始業の日が……



高等小学校(現在の中学校)の生徒が書いた作文。

この日の小学校は、始業式があった。みんなは夏休みを終え、久しぶりに友達に会って楽しい時間を過ごした。そして帰宅した直後に地震が起きた。地震のあとに小学校に通学してきた子どもの人数は、震災前の半分以上でなかった。

せっかくみんなに会えたのに……。



中央区内の小学校はすべて焼けてしまった。先生たちは焼けあとに子どもたちを集め、外で授業をした。仮の建物(バラック)が建てられ、子どもたちは家から持ってきた木箱を机のかわりにし、焼け残った教科書をみんなで使って勉強をした。

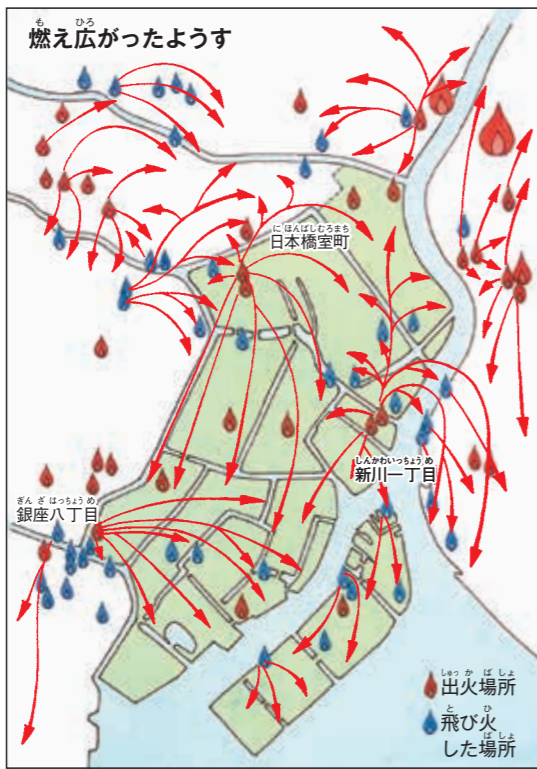


(上)門だけ残った常盤小。(右)青空の下で授業をする泰明小学校。

被害のようす

地震発生ときは、ちょうど昼食時で、火を使っていた家が多かったことも火事が発生した原因の1つだ。中央区では現在の日本橋室町にあった薬品問屋2店、銀座八丁目、新川一丁目にあった足袋屋がそれぞれ火元となった。ほかの地域からも飛び火や強風を受け、中央区一帯を焼いていった。

こんなに火事が広がったんだね。



規模	マグニチュード7.9、震度6
震源	東京都南方約100kmの相模湾
全焼	日本橋区 2万1616(2万3190)世帯 京橋区 2万9290(3万1880)世帯
死亡者	日本橋区 788(12万4600)人 京橋区 584(14万7200)人
行方不明者	日本橋区 401人 京橋区 584人
負傷者	日本橋区 11万8039人 京橋区 11万8801人

日本橋区が東京全市のなかでいちばん焼けた。()は、震災当日の世帯、人口。
※「中央区史下巻」より。

着のみ着のまま生きのびる

道路はくずれ落ちた建物のがれきだらけで、橋もくずれ落ち、救助活動は進まなかったが、川の多い中央区では船が大いに役立った。町にはあり合わせの材料を使ったバラックが建ち並び、臨時の市場がつかられ、食料や水の配給が行われた。また仮のしんりょう所がいくつもでき、けが人の治りようが行われた。



(左) 聖路加病院の焼けあと。(右上) 飲料水の配給。(左下) 築地本願寺にできた配給所。(右下) 道ばたに現れた露天商。

災害だらけの中央区



当時の浜町にあった河岸。ひざまで水につかっている。

自然災害は地震だけではない。中央区はもともと川がたくさんあり、昔から大雨による洪水など水の被害をたくさん受けてきた。写真は、1910(明治43)年8月10日の長雨により、隅田川のはらんし、洪水が起こったときのようすだ。大風による被害もたくさんあった。1911(明治44)年は3回も暴風雨があり、1917(大正6)年は大風のあと高潮も起こった。